



「小金沢君をあぶない目にあわせたお詫びよ。わたしの口ですつきりさせてあげるわ。それにこんなになつてゐることは、小金沢君も少しはわたしに魅力を感じてくれてゐるわけでしょ」

すがるような目で見つめられると、真也は全身が身震いするほど興奮してしまふ。

「も、もちろんです。先生はとつても綺麗だし。それに、先生の身体はすつごくいやらしいもの」

「うふふ。そんな台詞せりふも言うのね。ずいぶんイメージが違うわ。でも、うれしい。小金沢君が飲んでくれて」

うっとりとした表情を浮かべ、ぺろりと唇を舐めると、友紀は真也の股間でそそり勃たつているものに、チュツと音を鳴らしてキスをした。

そして、アイスクャンデーでもしゃぶるように、肉棒を口のなかに呑みこんでいく。

「うう……。先生……。すごく気持ちいいよ」

熱い粘膜にぬるぬると締めつけられて真也は低くうめき、快感のほどを友紀にぶつけるように、上から腕をまわして、すくいあげるようにして両手で乳房を揉んだ。

「うツ……。ううん……」

真也の愛撫に反応して友紀の身体がピクンと震える。その反応がうれしくて、真也はやわらかく張りのある乳房を揉みしだきつつづけた。

乳房を揉まれるにまかせながら、友紀はじゅるじゅると涎れをすする音をもらし、首を上下に動かしつつづける。

ガツガツした様子は、まるで飢えた獣が獲物を食らっているみたいに見える。

その獲物は自分のこの勃起した肉棒なのだ。多岐川友紀がそんなにまで飲んでくれるのが真也はうれしくてしかたない。

さらに熱い口腔粘膜がぬるぬると締めつけ、真也は下腹部が熱くしびれるほど快感を感じてしまう。

油断すると、このまま射精してしまいそうだ。

だが、若い好奇心はこの程度では満足できない。こんな幸運はそうそうないはずなのだ。できることなら、もっといろんなことをして楽しみたい。

上から見おろすと、四つん這いになって肉棒を無心にしゃぶっている友紀の突きあげたヒップが左右に揺れている様子がなんとも悩ましい。

くびれた腰からヒップにかけてが、綺麗なハート型を描いていて、濃紺の競泳水着が尻の割れ目に食いこんでいるのである。

完全に脱いでしまわず、Fカップの乳房だけを剥きだしにした姿がいやらしいと思つてそのままにしていたが、やはり最終的には真也の興味は徐々にそちらのほうに移つていく。

肉棒をしゃぶられたまま、真也は友紀の双臀を撫でまわし、お尻の割れ目に添うようにして股間に指先をすべらせた。

「ううッ……」

水着越しに指先が肉裂に触れた瞬間、ピクンとお尻を震わせ、肉棒を啜えたまま友紀が上目遣いに真也を見あげた。

「先生のおそこが見たいんです」

真也が弁解するように言うと友紀は肉棒をいったん口から出し、その唾液まみれのものに頬すりしながら少し考えこむように唇を噛んだ。

「いいわ。こんな中途半端なことじゃ小金沢君も満足できないでしょうし、わたしもスポーツマンの端くれだから、はつきりしないのは大嫌いなもの」

友紀はその場で立ちあがり、腰のあたりまでずりさげられていた水着を自ら脱ぎ捨てた。

「あああ、綺麗です……。先生の身体、すっごく綺麗です」